

平成六年度

特別研修員研究発表要旨

天台十乗観法の修行規定について

大窪 康 充

智顛(五三八・五九七)の晩年に撰述された『摩訶止観』(十卷)とは、実相を観得するにあたり、整備された行の体系を呈示するものである。その行の体系とは、観察の拠り所として立てられる所観の境(『いわゆる十境』)、またそれらを観察する能観の法(『いわゆる十乗』)といった構成を基本とし、十種の観法の方法を十境のいちいちの観察に適用して観法が遂行されるという、いわゆる百法成乗の観法である。

しかしこの広汎な修行体系は、一方で後世に様々な問題を残すことになる。ことに実際に実践するにあたって、能観の十乗観法における修行規定が、『摩訶止観』の論述のみでは容易に判断し尽くせないものがあり、それ故後世に様々な学説を生むことになった。所観の十境に関しては、『摩訶止観』が論述してくれる内容から特に問題はないが、一方十乗観法に関しては、それらの修行規定が曖昧であって、具体的には、行者の根性の相違によって十乗の一部だけを、または全体を必要とするのか、あるいはこの観法そのものに本来的に原則というものが在るのかどうか、といった問題になってくると容易に判断し尽くせない事情を有するのである。

確かに『摩訶止観』では、十乗観法の修行規定に関する明確な

根拠は見当たらないが、十乗における具略の分別が存在すること、もまた事実である。その具略とは、十境に対する十乗一々の説明にあたり、行者の機根の相違から、十乗の一部、あるいは全体を必要とするといった経過を呈示するものである。この具略が存在する以上、智顛が十乗観法において何らかの原則を設けたのではないかと、といった憶測は当然生じてくるはずであり、事実天台の学徒たちも、この具略に基づいて様々な学説を立てた。

この十乗観法の修行規定について、最初に学説を立てたのが五祖湛然(七一・七八二)であり、古来天台学界において最も有力視された学説でもある。すなわち行者の機根を上・中・下の三根に分別し、上根の者は最初の観不思議境の一行で目的に達することができると、以下中根の者は七法、そして下根の者は十法をすべて必要とする、という学説である。他に有力な学説では、上根一法・中根六法・下根十法といったものがあり、中根を六法と規定したところに特徴は見られるが、おおよそ上根一法説については両者の共通するところである。しかしこれらの学説、とりわけ上根一法説についても、前に記したような確かな根拠によるものではない。例えば△病患境▽・△禪定境▽における十乗観法では、確かに観不思議境の一行のみで目的に達することができる」と明言しているが、△陰入界境▽・△煩惱境▽では、前の三法(観不思議境・起慈悲心・巧安止観)を一具のものとして捉え、決して観不思議境の一行のみで悟りに入るといったことは明言していない。このような一例からいっても、具略の分別が決して一義的な様相を呈示するものでなく、所観の境によって微妙に異なっており、この点が十乗観法に修行規定を設ける上での最も困難な事情を有するのである。よって古来有力視されてきた学説も、

全く根拠がないわけではないが、また確かな根拠に由来するものでもない。そのことは、後世において決して定説が生まれなかつたことが何よりの証拠であろう。

さて、そもそも十乗に具略の分別が存するのは、行者の機根の相違に拠るものに外ならない。しかしそのような行者の機根そのものについて、智顛の円熟した実相原理に立つていう場合、これまで評価されてきた三根の分別だけでは片付けられない問題があるのではないか。いわゆる十乗観法の修行規定を行者の機根といつた点に注目した場合、それが具体的にどのような意味を有するものなのか。すなわち円熟した実相原理にたつて修する行者の機根といった課題が、十乗観法の修行規定を考察する上での最も重要なポイントになると思われる。そこで今回特に注目したいのは十乗の中の第三巧安止観である。いわゆる巧安止観では、信行と法行とに基づいた機根根性について言及し、それを基軸に安心法を示すと同時に、また十乗観法を修する上での、行者の機根の基本的形態をも説いているからである。今回の発表では、巧安止観の十乗観法全体における意義付けとともに、そこで説かれる機根根性を中心に考察し、十乗観法の修行規定について検討してみた次第である。

善導の観經教判論

調 晋 一

善導は、自身の仏弟子としての歴史的使命を「某今欲_レ出_レ此_レ觀經要義_一楷_ニ定_{セド}古今_ト(散善義)と被_レ歴_シている。楷定古今とは、「今乘_ニ三_ニ尊教_ニ広_ク開_キ淨土門_ヲ」(玄義分)という学術的當為である。善導はその根拠を「我依_ニ菩薩藏頓教_ニ一乘海_ニ」(同上)と表白する。それは、「我等愚癡身曠劫_リ來_リ流_レ轉_レ今逢_ニ積_ニ迦_ニ佛_ニ法之遺跡_一弥陀本誓願極樂之要門_ト」(同上)という遇教における決断である。善導の教判の視座は、仏法が末法五濁を生起する自身に本願の救済として現成した事実、すなわち回心を基点とする仏教の歴史観にある。回心という宗教的主体の目醒めにおいて、自身に至るまでの仏道の歴史的展開が、弥陀の大悲弘願を根幹とする本願流傳の歴史であったと覺証された本願史観である。またその課題は、「觀經」一尊教を開顯する一事において、仏教の現在性を仏弟子として批判的に問い、民衆に仏道を公開していくことにある。それは同時に、教理的整合性をもとに大乘、そして一乘・三乗の権実を誇示主張する聖道の仏教を歴史の大地より基底的に問い返していくことでもあった。今回は、「我依菩薩藏・頓教・一乘海」という集約的表現に託された善導の仏道領解を尋ねていくことにする。

善導の觀經理解の基軸は、發遣の教主釈尊と招喚の教主弥陀による二尊教と見定めた点にある。すなわち、積迦の要門(定善_ニ息慮凝心_ニ；韋提致請_ニ散善_ニ；廢惡修善_ニ；仏自開_ニ淨觀_ニ三昧)を